34.7/28

小百合集

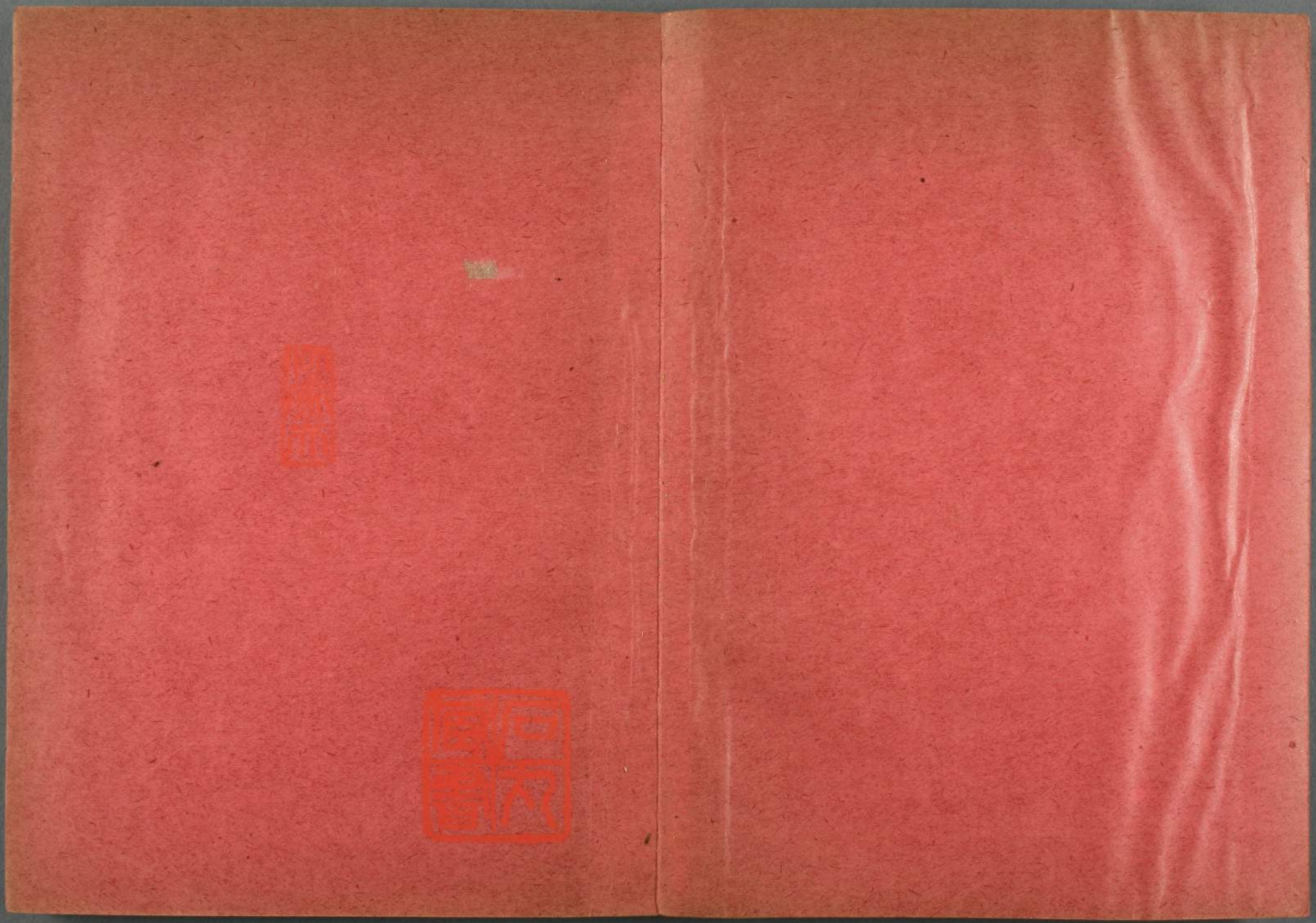
臥城

吉野臥城著

SAYURISHU.

小百合集

東京警醒社書店發兌



はしがき

過ぐる二十九年頃の作より三十二年の秋までの作を蒐めて、小百合集とは名づけぬ。もとよりみちのくの野の草がくれに咲ける小百合の色も香も淺くして、大方の目にとまるべくもあらじ。然はあれど自刈り捨てむことの惜しさに、散りなむとする花片をあつめたるのみ。

こを世に出すに當りて注意を與へ、且力をつくされたる内村鑑三氏の厚情を謝す。

後集は折を得て世に出すべくなむ。

明治三十四年四月二十日

櫻花さく窓の下にて

吉野臥城識す

目次

幻影……一
秋の歌……六
つきぬ恨……一〇
冬の歌……一六
花の歌……二〇
愛猫を葬る歌……二四
病……二九
早春の歌……三二
鬼の歌……三五

逢隈川邊……四九
晝の夢……五四
狂犬……五六
病夢……六五
訣別の歌……六六
雷の歌……七四
蜘蛛……八一
星の歌……八七
廣瀬川……九四

小百合集

吉野臥城著

幻影

風冷うに身をかすめ
影しづかなる夕月夜
野營の陣の篝火は
こゝにかしこにほの見えて
螢火かともまがふなり

ひとり陣屋を立ち出でて
駒の足掻をうち早め
荒野のあたりとめ來れば
腰の劍のきらめきて
いあゝく駒の聲もすむ

月影やどる草村の
露の命をよすがにて
鳴くや鈴虫くつわ虫
明日は馬蹄にかけられむ

今宵かぎりぞ汝が聲も
はかなき聲をきくにつけ
果敢なく消えしわが友の
そゞろに思ひ出でられて
草にはあらぬわが袖も
あやしの露ぞやどりける

さきつ日敵を探らむと
出でて行きにし吾が友は

いと勇しく戰ひつ
死にても朽ちぬ其名をば
この荒野にぞとゞめたる

そゝろに後(うしろ)みかへれば
かなたの丘のその上に
怪しや友は立てりけり
われをよばふか白妙(しろたへ)の
ハンカチーフをうち振りて

あまりに心うれしくて
怪しきこともうち忘れ
駒のかしらをかへしけり
鳴く虫の音をみだりつゝ
あやしき友のその許に

死にきと聞くは虚偽(いつはり)か
あな懐しとはせゆきて
問はむとすればいつしかに
消ゑてはかなき友の影

さては心やまどひけむ
彈丸の痕をば止めつる
松の木末に風わたり
いでそろひたる穂芒は
幾秋かけて吾が友を
月のひかりに招くらむ

秋の歌

秋は葎生露しげき
庵をめぐりてほゝゑめる
朝顔の香に口吸ひて
廣葉に氣息の觸るゝかな

恥しとてや朱紅を
片頬にそむる柿の實に
世のあぢはひを含ませて
一葉をさそふ朝ぼらけ

日のかげにほふ高棚に
戀ひしゆかりの色に出で
ふくらむ葡萄房肥えて
葉分の風にふるひけり

靡きもはてぬ稻の穗の
波のあやおる佐保姫が
まよひの霧をかき分けて
夢れぞろかす牧笛や

山路に椎の實はおちて
笹に聲ある日の晝に
枝うつりする山雀の
歡喜をしも歌ふかな

年の半はすぎの戸を
さすがさやけき夕月に
こぼるゝ露のさゝやきは
萩にはたれる秋の虫

いづれあはれは八千草の
露か霜かの有明に
老いて白髪とならむ時
こゝに大悟の光明あり

つきぬ恨

去年の白雪殘りなく
れくや露霜消ゆきて
風立ちかはる大空に

春の面影ほのぼのと
うかぶ霞にけぶる雨

伏屋つゞきの裏畑に
生ふる茶の木の下枝まで
もれぬは神の恩惠なり
今ぞつのぐむ上枝より
かゝるは春の光なり

カナタ
彼方の岡の八重ざくら

さくと見しまに花散りて
夏のひかりの訪れて
若葉は四方に匂ふかり

そこに雲ゆき雲かへる
「時ぞ」とて茶は五月雨に
顫くうひかうち伸べて
若きみどりの新ごろも
かづくにあまる嘆きかな

かゝる姿を
よそはへぞ
世にも時めく
わが身かは

この芽はつまれ
またつまる
幸なきわれと
たれか知る

心も知らぬ少女子の
戀歌畑にたゝしより
身を吹く秋の風寒く
衣かりがね鳴く宵に
わくは涙の露雫

せめて涙と
さとれかし
世をなきくらす
われあれば

氷らば白き
花たらむ
色も香もなき
冬の日の

おゆびをりつゝ待たねども
月日の色に見入るれば
青きこずゑはまれにして
紅葉の山のあやにしき
着てし少女(をとめ)は彼の方に

わが世淋しく咲く花の
香あきをいとふ人々を
恨むる色のうす白く
ひとり開きてひとり散る
入日つめたき夕まぐれ

冬の歌

冬の使にこがらしの
叩きてすぐる柴折戸に

かゝる時雨の音さえて
門の杠谷樹に愁ひあり
銀杏の霜葉黄に落ちて
楓樹はあかく茶鼠に
桑の葉ちりて野べ山べ
世の寂しさも見ゆるかな
垣にかゝれる蔓草の
いつしか枯れてその骨を

朝日に晒す下かげに
あはれ水仙花ぞ咲く

白きは何ぞ霜消えて
殘るは花のかをりなり
夕日にはゑてくれなゐに
落つる南天色ぞ濃き

冬をさびしと誰れかいふ
秋にさとりの光みて

こゝに名利の花をすて
ゆきて又くるかりの聲

雪は野山を埋むとも
松はみどりに杉黑し
枯木の枝の夕がらす
鳴くも詩趣なからずや

仁王は寺の門の邊に
りきみてれはず寒さにも

痩せぬは風の聲にして
氷は清きものあるを
きよくて濁る世の中の
夜の巷をゆく月に
寒しといひてむせぶあり
春にうかれて笑ふあり

花の歌

花にかゝりて花になみ
雨にひらきて雨にちる
くしき心は天地(あめつち)の
まよひを覺(さゆ)す詩なるかな

花になびきて花に消え
雲にかをりて雲にちる
くしきこゝろは曙の
まことを歌ふ畫(ふ)なるかな

花にむつびて花とまひ
蝶にかをりて蝶とちる
くしき心は夕ぐれの
まことを歌ふ書なるかな

花にねぶりて花に醒め
月にかをりて月にちる
くしき心は眞夜中の
眞(まこと)をうたふ書なるかな

花に狂ひて花と飛び
蜂にかをりて蜂と散る
くしき心は日の中の
まことを歌ふ書なるかな

花に迷ひて花に笑み
風にはこりて風に散る
くしきこゝろは天地(あめつち)の
大悟(さとり)を開く詩なるかな

愛猫を葬る歌

あはれ強食弱肉の
世のことわりに洩れずして
いとしの「たま」は儚(はか)くも
あしたの星と消えしかな

蜂蝶花に狂ふころ
東の家に汝(な)は生れ
燕子軒端を巣立つころ

西の庵に育ちにき

仇(あだ)なす鼠族狩らむとて
敏鎌(とがま)に似たる爪をとぎ
飼はるゝ恩を謝せむとて
技を錬りけり眞夜中に

ねびし姿に逞しく
かしこき色もあらはれて
にこのにこ毛に美しく

をかしき光澤もそひにけり

あゝたのもしの猫やとて
ほめてたゝへていつくしみ
行末さきくあれかしと
望めることや仇なりし

愚には幸ある浮世にて
賢に幸なきうき世とか
有望の身はとく亡び

無智百歳の壽を保つ

汝はかしこき猫ゆゑに
里の魯猫に惡まれて
まだ一年もたゝぬまに
爪牙の電と失せしかな

遺恨の双齒くひしめて
閉ぢもはてざる眦に
殘る涙のひとしづく

いかなる意味を寓すらむ

世は無慘なる禍津日か
運命の鉾提げて
ふるゝがまゝに斃すなり
あたるがまゝに屠るなり

浮世をかくと悟りあば
せめて恨むること勿れ
神の光にてらされて

とはの眠をもとめよや

病

精神五体衰へて
元氣いづくに潜むらむ
世を罵りし舌枯れて
藥をよばふ聲はそし
無念の双齒くひしめて

男兒(をのこ)の眼ひかるのみ
豊頬朱唇色あせて
少女のかひな動くのみ

老はあしたの風に泣き
幼はゆふべの星にれづ
泣くもれづるも樫の實の
ひとつの生命(いのち)をしめばぞ

人生五十の坂こゑて

さてもうき世や捨て難き
いまだ三四の關も經で
すつる浮世や惜しからぬ

唯運命の手に委して
生死の道をわきかねつ
あやむ現(うつゝ)ぞあはれなる
わづらふ夢ぞあはれなる

早春の歌

時はめぐりて風ぬるみ
自然の吹息(いぶき)あたゝかに
いたりわたれば野も山も
春の光によみがへる

霞の衣をひきまとふ
高根は雪の肌を見せ
緑翠(みどり)をなでて流れよる

野川は琴をひきそめぬ
谷の古巣の夢さめて
わかき希望(のぞみ)を抱きつゝ
にほひを辿る黄鳥(うぐひす)は
やさしき曲を奏(かな)づなり

冬にねぶれる奥山の
瀧もいつしか醒めはてゝ
あがれの絲を繰りかへし

雄々しき歌を調ぶなり

あはれ有情(うじやう)の鳥の曲
あはれ非情の水の歌
いづれ生命(いのち)をやどしたる
まことの聲にあらざらむ

まことの聲をきく時は
無我の境にさまよひて
詩神(ミューズ)の前にひざまつき

えばし美に醉ふ心地かな

鬼の歌

日月天に輝きて
星辰空にきらめきて
てらさぬ隈はなけれども
社會の暗は晴れずして
光明(ひかり)をよばふ聲枯れぬ

腥風颯と吹きしければ
雲村々と立ちのぼる
中に閃く電光の
幽界にも通ふこゝちして
惡の苍に消ゆるかな

暗いとゝしく擴りて
僞善は躍り不義わらひ
壓制うたひ阿諛は舞ふ
舞にあはする法螺の音

舌のつゝみの亂調子
陽氣はこゝにめぐり來て
咲くや黃金の花ざかり
もゆる鬼火に燦爛と
映ずる庭の奥ふかみ
百鬼狂ふぞすさまじき

頼光去りて九百年
現世に鬼の跡たにて

幽界にはありと聞きしかど
見しこともなき其の鬼を
夢あらで見る怪しさよ

角あるものを鬼といふ
それは昔のことにして
今は角あき鬼のみぞ
社會の暗に時を得て
良民の血を啜るなる

見ずやつゝれを身に纏ひ
笠をいたゝき鍬を負ひ
わかつき星を踏みて出で
三更月にうそぶきて
家路をいそぐ農夫あり

夏の暑さも雨風も
冬の寒さも雪霜も
物かずかはといそしみて
その得る所いくばくぞ

立つるや樹の細けぶり

年貢はいよゝ重うして
穀の價は高からず
去年の負債を償ふに
家財ひさぎてゐほ足らず
飢寒はせまる藁の庵

地主眼を瞋らせて
鍬も鎌も奪ひ去り

富豪鐵拳を振りあげて
簞笥長持うちやぶり
なほあきたらで蹴つ打ちつ

法律の力も何ならず
黄金の光ひらめけば
一夜の中に春立ちて
消ゆる泡雪それよりも
良心早く失するなり

見ずや鐵槌ふりあげて
燒くるが如き爐にむかひ
もゆる炎の前に立ち
腕も折れよと生業の
ためにいそしむ鍛冶あり

花咲く春の花も觀ず
月てる秋の月も看ず
朝はまだきに閨を出で
夜は更くるまで勵めども

とつても貧と槌ぞ泣く

課稅はいよゝ重うして
賣る物常に高からず
負債は塵とつもれども
吹き拂ふべき風もなみ
妻子の飢をいかにせむ

窮乏店に迫る時
口に慈善を叫びたる

旦那も今は聲をあげ
暴虐の鞭うちふりて
牛馬を御する如くなり

實にこの農夫、この鍛冶
そればかりかは日傭や
獵師、職工、漁夫、織女
苦痛の海にたゞよひて
鬼火の影にわめくなり

わめくも泣くむ悲むも
馬耳東風と聞きあがし
土を踏むよりあは輕く
ふみ蹴散して同情の
涙は早も涸れにけり

諂ふ花のためならば
愛する妾のためならば
人の豪を搾りても
民の血汐をすゝりても

樂しとばかり思ふめり

見よ烏婆玉の雲を得て
黄金の花の香に迷ひ
十年の節をなげうちて
政友を售り人民を
殺すも遂にかへりみず

あゝ人誰れか二もとの
角あるをのみ鬼といふ

あぶらを搾り血を啜り
權威を暗に揮ふもの
これまた鬼にあらざるか

世に神もあり佛もあり
善美の光明きはてず
など鬼のみにまかすべき
怒るは誰れぞ志士義人
魔を切る利劍こゝにあり

魔を斷つ利劍こゝにあり
ひとたび鞘を拂ひなば
正義の光皎々と
天にかゝやき地に照りて
社會の暗やはれゆかむ
逆手にもちてうちふらば
腥風とみに吹きたゝて
僞善は滅び鬼は死に
歡樂いつか生れ來て

自由の花やひらくらむ

逢隈川邊

友を携へて阿武隈河畔に逍遙す、藥瓶もてる少女あり、舟を待つなるべし。

白鷺わたる逢隈の
川のみぎはの砂原に
さびしく立てる少女子を
あはれと君はればさずや

夕陽をうけて來る舟を
待つ間にたゆずつく息も
物れもひわる風情にて
しをれがちなる面わかな

流に殘る夕ばえの
色ふきわくる河風に
柳の古葉こぼれて
更けにけらしあ此の秋も

希望は水とながれゆき
世の歡樂もあぢはゝで
沈みたるらし運命の
鳴門のくらき渦卷に

あはれ式部の智慧眠り
清女の才もれとろへて
自然をたゝふる歌もなく
珠をつゞるは涙なり

涙のたつる眞砂地を
はれば湧き出る眞清水に
やどるるか星もまたゝきて
恨はつきじ行く秋の

つめたき人の世に生きて
さかりの時にあひもせず
空しくなやむ胸の血を
せめて鎭むる藥壜

あゝ美しき鬢の毛の
ほづれを撫づる袖口の
紅絹にぞさはる白百合の
かひなも痛く痩せしかな

近づく舟にさからひて
さゞらく水の音きけば
そこに冷き調べあり
こゝにさびしき影はあり

夕波むせぶ逢隈の
川のみぎはの砂原に
寂しく立てる少女子を
あはれと君はねぼさずや

晝の夢

棕梠の葉そよぐ下蔭の
簀の子の上に三郎は
白日の夢を見てしより

ひごとにゆきて眠るなり

あはれ晝寐は害ありと
いひきかすれど首ふりて
いやとよわれに益ありと
唯すやすやと眠るなり

ゑくぼ傾けさめし時
見しは何ぞと言問へば
常世の母にあひつると

涙ながらに語るなり

狂犬

雲を破りて走りゆく
月の光を背に浴みて
風のそよぎに立ちとまり
塵のすさびにうち狂ふ
犬の聲聞け悲みの

情を知らぬ痴ものが
笞ふりあぐる夕まぐれ
ちるや快樂の花ふゞき
たちまち迫る苦痛の
嵐に堪へぬこゝろかな

肉一片を手にのせて
呼ぶ聲にくし虚僞の
笑窪の中に毒もりて
欺き殺すたくみぞと

知るかあはれの犬の子よ

倚頼すくあき世の中の
權家の門に尾を掉りて
露のさかゐに生きむより
狂はゞ狂へ吼ゐば吼ゐ
うき世の暗を破るべく

あるも幸なき身なれども
うちすてかねし精神の

片時世をばわすられず
湧き立つあけの血を吐きて
叫べよ不義を斃すべく

あした荒野の末に吼え
貴族の衣を裂きし齒の
ゆふべ甘味をかみしめて
伏屋の夢を破るてふ
狸に似たる狗を刺せ

都大路の春の風
吹くや輕羅の袖に香を
包みて走る馬車に觸れ
泣く子を乘せて情なき
人のうなじを嚙めよかし

巷の柳秋見ゐて
古葉こぼるゝ朝ぼらけ
鍬を荷ひてとぼとぼと
歩む老翁を追ふなかれ

まとふ繼樓の見憎くも
露をはなるゝ蜻蛉の
よるべ菜畑の花陰に
ひそむ蛙を蹴散らせよ
告天子の雛の血を吸ひて
さまよふ蛇の腹を裂け

狂ふといはば狩りたてむ
誠を知らず義を知らで

餌をむさぼるけだものゝ
牙を鳴して逼るとも
あゝその腰を折る勿れ

餓ゑて其の身の細るとも
しばしは忍べ義の爲に
よしや渇きて堪へずとも
汚れし水を飲むなかれ
死の神れらぶ時の間も

大路の橋におり立てる
狐が虎の威を借りて
自由の民に干渉の
しもとをあつる右手を打ち
よろめく足を碎けかし

かへるや主婦にさいなまれ
夕ぐれ寒き里川の
風にイむ子守女の
あはれを外に吼えつくな

小兒の夢もさむべきに

とても甲斐なき世と知らば
胸にひめたる革命の
聲をしぼりてかけめぐり
虚榮にはてる股を嚙め
罪なき人を救ふべく

かまれしものゝ狂ひ死に
嚙まれぬ人の長らへて

光明をよばふ聲の中
希望の影のうかびあば
汝の狂も癒ゆべきか

病夢

病みて眠に入りし時
こひしき人に逢隈の
川瀬の月に舟うけて
わづかに語る吾がおもひ

さめて病にあやむ時
こひしき人のおとづれて
ひたひに觸るゝ手を握り
物をもいはでわれ泣けり

訣別の歌

今故郷を去らむとす
かへり見すれば臥牛城
影は消えゆく風の外

僅に招く氏神の
恨は長し杉のうれ

唯緑なる何處にか
門の柳はしだるらむ
その下蔭にさらばとて
をしむ涙を父母の
わかれの袖に兄弟の
包みし影よ何處にか

あゝ止めむとは思へども
とゞまらなくに軌り行く
この小車をいかにせむ
心ぞ弱きためらはゞ
時は過ぎなむ「汽車の時」

幾年こゝに熱涙を
濺ぎてつくす精神を
知るものゝなき悲しさは
心にひめて世の人に

うち洩さでもありぬべし

あしたに阿媚を東に
ゆふべは節を西に賣り
虚榮を誇るけだものゝ
尾をふるさまに唾して
蹴るに堪へむや骨なきを

沼にたゞよふ浮草の
定めはなしと聞きつれど

それにも劣る男子とは
われ物いふを好むべき

朽ち腐れしはそのまゝに
置けよあまあか手をつけて
わが身を汚す愚をなすな
若しも濁れる水ならば
また澄む時のあらもせむ
遮莫はこりがに

われ清しとにあらねども
抱ける主義は唯一つ
うき世の人と合はずとて
爭で折るべき此の腰を

あゝ天高し地廣し
仰ぎて俯して恥ぢめやは
神より受けし身の幸を
ひとり祝ひてはゝゑみて
主義に死ぬべき運命かと

思へば慰むすべもあり

思へば慰むすべもあり
故郷人はみづからが
處世の才に疎くして
地位を得ぬを笑ふとも
わらふ心にまかせてむ

富は「草葉にれく露」の
遂に消ゆべき光ぞと

知らぬ利慾の徒輩に
眞理を説くも石像の
聞くべき耳のあきがごと

人の嘲笑も何ならず
主義を抱きて主義のため
いま故郷を去らむとす
かへりみすれば臥牛城
汝は惜むか知己の身を

わづかに招く氏神の
恨は長し杉のうれ
さらば別れむをしへ子よ
噫まさきくてあれよかし
心の眞珠みがきつゝ
さらばわかれむ故郷よ
又逢ふこともあるべきに

雷の歌

一たび聲をはりあげて
黒雲招き雨呼べば
天地は震ふ時のまに
たのしき風の滿ちしかな
東に西にかけめぐり
南に北にとゝろきて
毒氣を拂ひ魔を斃す
叫びは似たり革命の

雲に閃き氣をとはす
その電光の走る時
暗は迷は破られて
しばしはひそむ惡の聲

魔をおそれざる世の中に
避雷の柱かず增せば
うはべにかざる文明の
衣は不義の裏の色

法律は弱きを縛る繩
强きはいつか遁れ出で
眞晝にふるか怪力も
挫くに足らぬ淺間しさ

佞奸邪惡はびこりて
人の血を賣り舌を售る
黃金は隨喜の光にて
阿媚はさかゐの花にして

かれ時めきし眞ごゝろの
利劍は匣の底に鳴る
雷のひゞきに電光に
血汐のくもり拭はむか

たちまち疾風峰に湧き
光、轟音すさまじく
青葉ぞ狂ふ中空を
吼えてたばしる雨の脚

輕車馳せ行く道のべに
をごりを洗ふ水狂ひ
旱をかこつ小山田に
めぐみの雫あふれたり

魔の住むところ玉樓に
震ひはためく雷の火や
罪をかさねし奸物の
さかゐをやきぬ悉く

いくその毒を世に吐きて
蒼生を惱ませ害ひし
をろちの潜む杉森に
落ちてたふしぬ殘りあく

紅塵とみにをさまりて
汚れ苦み流れ去り
樂しさ、清さ生れ來て
野山に滿てり歡喜は

あゝよろこびの聲の中
革命よびしますらをは
はれゆく空の白雲と
虚名を捨てゝ隱れけるかな

蜘蛛

五月雨はれし夕ぐれの
蜘蛛のふるまひ汝見ずや

軒より竹にひとすぢの
絲引きはへて縦横に
張るやいくすぢ白絲の
網はなりけり精巧の
勉めてあらぬことやある
まいて享け得し其の技を
揮へば奇しや幾角の
形おのづとそなはりて
さも清げなる住家かな

何を目的の住家ぞと
かつは怪む彼方より
吹くや夕風さらさらと
渡ればかゝる虻ひとつ
虻はくるしむ網の中
蜘蛛は勇みてふりあぐる
利器にさしもに暴虐の
舌をふるひて民の血を
吸ひたる彼れも斃れたり

さすが光明をはづらひて
葉裏にひそむ毒蝶の
暗にまぎれて舞ひ出でむ
罪の翼のあへなくも
鋭き爪に刺されたり

時に罪おき蜻蛉の
網にかゝれる蚊を追ひて
生命を隕すことあるも
きよきこゝろは神ぞ知る

げにおもしろの蜘蛛の巣や
この世のさまを飾りなく
うつす鏡にあらざるか

あらず醜き毒蝶の
暗に時めくごとくにて
血を吸ふ虻のわがまゝに
雲にとび入り草に舞ふ

たれか夕の蜘蛛とおり

正義の網を世に張りて
僞善を斃し不義を刺す

壓制つゞく五月雨の
霽るゝや雲のちりぢりに
裂けて自由の夕光
かゞやく空によろこびの
聲のとゞろくその時を
おもへば堪へぬ涙かな

星の歌

あゝ茫々の昔よりの
夜の御空に咲き出でて
幾春秋の雨風に
散ることを知らぬ星の花

暗六合を襲ふ時
姿も清くあらはれて

愛の光をふりまけば
情に渇きて苦める
世の人皆は仰ぎ見て
慰籍の眉をひらくかな

雲に隠れて雲を出で
丈夫を守る星もあり
明皎々とかゞやきて
四海をてらす星もあり

水漾々と流れ去る
ナイル河畔のダミエット
踏みにじりたるますらをは
凱歌をあぐる聲の中
感謝さゝげぬ神の星

歐土の風を叱咤して
鐵騎の走りゆくところ
草木もなびく勇將の
頭上に高く輝きて

みちびく星の光あり
人には見ねぬ影なれど

あはれ其の星今いづく
空に無數の星ありて
永久の光彩美しく
照れど名あるはまれらなり

北辰つねに北を指し
蒼浪萬里太洋の

潮をわたる船旅の
道のともしと仰がれて
名は群星の上にあり

金星光あきらかに
明暮人をさとすごと
西に東にあらはれて
まだたく時に涙あり

星もなげくか人知れず

聲なく落つる一雫
下界の花の朱唇に
おきては露の珠となり
はかなく消ゆる習ひかな

花は下界の星にして
星は御空の花なれば
天と地とに生れたる
姉妹ぞとは歌へども

妹の花はうつくしく
匂ふといふもひとさかり
姉なる星は永久の
希望の上に開くなり

あゝ永久の星の花
たれか匂を慕はざる
あはれ希望の星の影
たれか光を仰がざる

廣瀬川

序

風にうちふす故郷の
草を出でたる身はひとり
五城の雲に入りくれば
あがれは清し廣瀬川
底のさざれに水澄みて

岸の眞砂地露ふくみ
あしたは動く雲の色
ゆふべは宿る星のかげ
岩根をわたる翡翠の
歌に靜けき快樂あり
名もあき花に少女子が
神秘をひらく姿あり
想ひは沈み筆重く

罪なき紙をやぶる時
讀むに懶く氣は倦みて
眠のわれを襲ふ時

虚榮を嘆き世を泣きて
心の波のすさぶ時
やどりを出でて徜徉へば
胸にさゝやく水の音
流を遠くながむれば

かすかに神の琴を聞き
平和の光かゝやきて
憂愁も空に消ゆるかな

其の一

朝まだきに散歩すれば、流に臨みて、網をおろす童あり。

曙白く星消えて
風ふきわたる川面に

影を落して唯ひとり
冒をおろすわらはべよ

清瀬さばしる鮎の子の
快樂を思へ人の世の
苦きを盛れるさかづきを
含みてわれを泣かむより

まとふつゝれの胸の上に
心の光かゝやけど

眼はくぼみ髪のびて
姿もいたく痩せしかな

又と語るな悲しきに
父、無き罪にれとされて
母は病にうめくとよ
げにもあはれの身の上や

見よ岸のべに開きたる
花に情のあるものを

人に涙の涸れ果てゝ
例令現在につらしとも

至誠の道ぞ實なる
虚僞の巷を行く勿れ
心の力折るあかれ
神は守らむ汝が身を

譬をあげよ細鱗は
網にかゝれり嬉しげに

清き尊き手によりて
捧ぐる犧牲になりなちむと

其の一

午熱のはげしきに、燒けたる砂の上をふみつゝ砂利とる女あり、車を曳くは夫にやあらむ

深緑の蔭に香を探り
風のしらべに慰みて

廣瀬の川をとめ來れば
心のうさもはれにけり

岸のこなたを見入るれば
春にはのめく陽炎の
それかとばかり燃え立てる
中に砂利とる女あり

こぼるゝ汗は眞砂地に
露ともなれかず消ねゆけど

暑さも忘れ身もわすれ
黒きかひなを揮ふかな

柳の枝を背にさせる
男子が曳くや小車の
轅を止めて見かへれば
女はれもをあげにけり

「日に燒けたりや汝が顏の」
「黒くなりしよ君が頰の」

「痩せにけらしな汝が影も」
「細りけらしな君が身も」

「汝と二人しあるなれば
いかなる業もいとふべき」
かたみにそゝぐ愛の雨
わらふや清き百合の花
名利を俗にもとめねば
心にかゝる雲もなく

虚榮を人にはてらねば
胸をいたむる風もなし
あはれ床しのなからひよ
幸多きかないもとせよ
自ら動きはたらきて
生活しゆくこそ尊けれ
人は暑さを避くといふ
身の苦しさを何とせむ

知らずや夏の涼しさは
心の中にあるものを

其の三

初秋のころ澱橋頭に立ちて獨吟す、露よりのぼる月の夕

夕日うするゝ彼方より
野こゑ山こゑ走り來て
秋姫さそふ初風の

すゞし澱の橋のうへ

露よりのぼる夕月の
光をいまだまばゆかゝみ
研ぐに肖たりあ萬象の
清くうつらぬ方もなし

ながれにをどる腹赤の
くしき響におどろけば
黄金をちらす水の面に

細かき波紋を織りてゆく

きよきは水の心かな
清きは月のひかりかな
濁るは泥のあればなり
曇るは雲のあればあり

心のきよき眞砂地に
眞と書ける文字を讀め
迷の雲をはしわけて

すめる善美の光明にて
仰げば虚空は高くして
神秘をかたる星のかげ
耳をさませば草村の
虫のしらべも清きかな

其の四

肥馬を清流に洗ふ兵士あり、その淺黒き

おもわには無限の憂愁をたゝへて、砂上
にうつる影さへいたく痩せたり

夕日かたぶく兵營の
喇叭は清し廣瀬川
流に馬を追ひ入れて
鬣撫づるつはものよ

それは愛馬か強兵を
口にとおへて民の血を
搾りて得たる虚榮を

胸にかざれる將軍の

尻尾を拂ふ秋風に
四足を立てゝ夕雲の
光をにらむ瞳より
電光とばす力あり

耳そばだてゝ嘶けば
いはほに咽ぶ水狂ひ
をぢれば野べの夕嵐

草木も靡く風情あり

流にうつる汝が影の
細き姿にくらぶれば
むべ肥ゑたりな逞しく
そおはる威勢れのづから

悲むなかれつはものよ
故郷遠き妻も子も
國のためぞとあきらめて

野山に鋤をとるものを
靴に蹴られてなぐられて
これが天晴義務ぞとは
似非愛國のいふところ
よしや心に堪へずとも

羨むかれ馬の身を
肥えたりとても何かせむ
鬣とりて追ひあげよ

しばしの休息(やすみ)與ふべく

流を見れば浮び來る
花に眠れる蝶ひとつ
如何の秘密抱きつゝ
夢より夢に痩せにけむ

思へば堪へぬ涙かな
つはもの痩せて馬肥ゑて
一將榮ゑ萬骨かれて

あゝそれ國の起つべきか

民は疲れて野は荒れて
伏屋(ふせや)の烟うするゝに
ひとり將軍馬肥ゑて
西風そゝろ身にぞしむ

暗吹きおくる夕空(ゆうぞら)に
聞けよ喇叭の悲しきを
彼れも責苦(せめく)に身は痩せて

故郷のみや慕ふらむ

さゆり集終

明治三十四年七月二十五日印刷
同　三十四年七月二十八日發行

定價拾五錢

復製不許

著者　吉野甫

發行者　東京々橋區采女町二十四番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

發行所　東京々橋區采女町二十四番地　警醒社書店

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

廣告

內村鑑三君譯

○英和對照 愛吟（新体詩歌）

定價十五錢
郵稅二錢

池亭吉君著

○淚痕集

定價七十五錢
並五十錢